名古屋市教育委員会定例会

平成23年1月19日
午後2時00分
教育委員会室

議案

- 第1号議案 名古屋市立高等学校学則の一部を改正する規則案
- 第2号議案 平成23年度 名古屋市学校教育の努力目標について
- 第3号議案 平成23年度 教職員研修の基本方針について
- 第4号議案 名古屋市教育委員会表彰について

出席者

坂井克彦 委員長
三林久美 委員
永井幸代 委員
古川隆 委員
野田敦敬 委員
伊藤彰 教育長
教育次長始め、事務局職員28名

○坂井委員長から、第4号議案は、名古屋市教育委員会会議規則第6条の規定に基づき、非公開にて審議し、会議録についても、記者クラブ発表するまでの間に限り非公開とする旨の提案がなされた。

全委員の了承が得られ、そのように取り扱われた。

第1号議案 名古屋市立高等学校学則の一部を改正する規則案

○太田総務課長から第1号議案について次のとおり説明がなされた。

改正内容は、市立高等学校の校長が教育委員会の承認を得て、学期の始期及び終期並びに休業日の変更を行えるようにするものである。

改正理由は、高等学校学習指導要領において、「長期休業中の授業日の設定」や「産業現場等における長期間の実習」に関する記載が新たに加わったこ

とを踏まえ、これまで長期休業日に行ってきたインターンシップや大学への体験入学を教育課程、すなわち正式な授業として位置付けることを可能とするため、学期の始期及び終期並びに休業日の変更について、規定の整備を行うものである。

施行期日は平成23年4月1日からである。

三林委員から、改正理由が教育課程に位置付けることを可能とするとのことだが、今までは正式な教育課程として行われていなかったのか、との質問がなされた。

朝倉主幹（高等学校・幼稚園教育）から、インターンシップについては授業日に行う場合と夏季休業中に行う場合があるが、夏季休業中は自主活動というとらえ方で、授業日として換算せずに実施している、との説明がなされた。

三林委員から、教育課程に位置づけることにより、インターンシップや大学への体験入学が行いやすくなり、機会が増えることにつながるのか、との質問がなされた。

朝倉主幹（高等学校・幼稚園教育）から、授業日として設定することにより、生徒の活動を評価できるようになる、との説明がなされた。

坂井委員長から、高等学校の学習指導要領が告示されたのは平成21年3月だが、施行日が平成23年4月となっており、2年経過しているが、平成21年4月や平成22年4月から改正できなかった理由があるのか、との質問がなされた。

朝倉主幹（高等学校・幼稚園教育）から、平成21年3月の告示を受け、校長会との協議や一般教員への影響の検討を行った結果、この時期になったものである、との説明がなされた。

坂井委員長から、例えば夏季休業中にインターンシップに10日間行くと授業日扱いになるが、その分、夏季休業を増やすのか、減ることになるのか、との質問がなされた。

朝倉主幹（高等学校・幼稚園教育）から、インターンシップ等については、特定の生徒だけが行う場合、学科・学年単位で行う場合など様々であるが、当該生徒にとっては授業日が増え、休業日が減ることになる、との説明がなされた。

坂井委員長から、学期の始期と終期を変えることができるとなっているので、例えば9月1日からが2学期だとすると、9月10日に遅らせることも可能だということか、との質問がなされた。

朝倉主幹（高等学校・幼稚園教育）から、年間を通じて休業日を増やすという考え方は持っていないが、規則上は可能である、との説明がなされた。

全委員の賛成をもって可決された。

第2号議案 平成23年度 名古屋市学校教育の努力目標について

○安保指導室長から第2号議案について次のとおり説明がなされた。

名古屋市学校教育の努力目標は、学習指導要領や本市の教育振興計画の実施状況などを踏まえ、本市の子どもの実態をもとに毎年設定し、各学校園へ通知しているものである。

各学校園では、この通知を受けて、それぞれ学校努力点を設定し、その推進に努めている。

平成23年度は、新しい学習指導要領が小学校で本格実施されるとともに、4年間にわたり進めてきた「なごやっ子 教育推進計画」から、新たな教育振興基本計画へと切り替わる節目の年度となっている。

そこで、平成23年度に向けては、新たな学習指導要領や教育振興基本計画の基本理念、さらには、本市の子どもの実態を踏まえ、過去4年間継続してきたキャッチフレーズをはじめとする、努力目標の変更をしていきたいと考えている。

具体的な変更点について提案する。

前文の第1段落について、これまでのものに「豊かな感性と創造力を備え」という文言を追加した。本市の教育振興基本計画の基本理念の一つである「豊かな感性と創造力」を、学校教育の様々な場で子どもに育みたいとの思いからである。

第2段落であるが、ここでは、学校での現状と課題を述べている。その中で、本市の子どもの体力低下に歯止めをかけたいとして、本市の課題の一つである「運動習慣の確立」の文言を新たに盛り込んだ。

第3段落では、各学校園における教育活動の推進の方向性について記載してある。教育振興基本計画の実現への重要な視点である、幼稚園から小学校へ、小学校から中学校へ、中学校から高等学校へという「学びの連続性の重視」を

盛り込んだ。

第4段落は、キャッチフレーズと4本の努力目標へのつながりとなっている。

続いて、キャッチフレーズの変更である。

過去4年間は「あふれる感動 つながる力」というものであった。これは、どの子どもも、感動ある授業を受けること、学ぶことに感動を持ち、意欲を高める姿を「あふれる感動」という言葉で表現したものである。また、自ら学ぶ力、コミュニケーションなどの人間関係力、規範意識などが子どもの中で、つながりあって総体として人間形成を図ることを「つながる力」として表現してきた。

今回、新たなキャッチフレーズについては、目指す「子どもの姿」で表現したいと考えた。様々な子どもの姿を思い浮かべる中で、2つの「子どもの姿」に絞った。

1つは、いじめや不登校がなく、だれもが笑顔で学校生活を送ることができる姿、今1つは、学習への興味・関心・意欲が高まり、瞳を輝かせて学ぶ姿である。

笑顔が広がる学校づくりに向けたきめ細やかな生徒指導や、子どもが瞳を輝かせて学ぶための授業づくりに、各学校が全力で取り組む決意を込めて、2つの目指す「子どもの姿」を、「広がる笑顔 輝く瞳」というキャッチフレーズで、各学校園に示していこうと考えている。

各学校園においては、子どもの笑顔が広がっているか、子どもの瞳が輝いているか、を確かめながら、日々の教育活動を展開していったほしいと考えている。

最後に努力目標の内容の変更についてである。

努力目標は、これまでの4年間と同じく4つの柱とする。知・徳・体に加えて、感性を育むことを柱としているのが本市の特徴である。今後も各学校での継続的な取り組みに期待をしているところである。

変更点は1つ目の柱である。新学習指導要領で重視されている、思考力・判断力・表現力を育成したい力として具体的に「自ら考え、判断し、表現する力」と表記した。

以上が変更点を中心とした提案である。

教育委員会としては、この努力目標を基に、各学校に対して、一人一人の教師が、子どもの指導について重大な職責を有するという自覚と責任感をもって、創意に満ちた特色ある学校教育の充実と推進に努めていくよう指導していく。

三林委員から、昨今の子どもを取り巻いている状況に照らし合わせて、「広がる笑顔 輝く瞳」というキャッチフレーズは非常に素晴らしいと思う。ぜひこれを具現化できるような学校努力点を各学校が設定して、子どもが過ごしや

すい学校環境にしてほしいと思う。そのような期待が持てる努力目標だと思う、との意見が出された。

坂井委員長から、努力目標は何かに基づいて設定しているのか。また、他都市でも設定しているのか、との質問がなされた。

安保指導室長から、学校園の管理運営に関する規則に、学習指導要領及び教育委員会が定める基準に基づき、教育課程を編成するという規定があり、その基準となる考えを各学校園に伝えるため設定するものである。これを踏まえ、各学校園では教育目標、さらには学校努力点といった単年度の目標を掲げている。名古屋市では毎年見直しを行いながら続けているが、他都市では単年度の学校努力目標を毎年掲げるということは行っておらず、教育振興基本計画で定めたものを何年間か続けて使用したり、明確なものはないということを知っている、との説明がなされた。

古川委員から、下段に1から4までの努力目標があるが、教育委員会としてのプライオリティはあるのか、との質問がなされた。

安保指導室長から、かつては番号が振ってあったり、○であったりしたが、1から4までの順番性はない。昭和44年から記録があるが、毎年検討を行い、柱の見直しや内容の見直しを行った。平成18年度までは知・徳・体の3本柱を示していたが、「なごやっ子 教育推進計画」の策定にあたり、様々な論議の中で、名古屋の子ども達に身に付けてほしい力として、感性という事柄を重視すべきではないかという意見があったため、柱の1つとして加え、現在の4本柱となった。時の状況により文言の修正を行うが、知・徳・体に加え、感性ということでここ数年は示している、との説明がなされた。

古川委員から、前文で「豊かな感性と創造力を備え」とあり、下段の努力目標では1が表現する力の育成、2が豊かな感性の育成となっており、どちらか優先するのか、との質問がなされた。

安保指導室長から、感性については、知・徳・体の全てにクロスオーバーする形となるため前文に掲げたが、4つの柱ではそれぞれを意識していこうということである。知・徳・体は学校の中でも馴染み易いが、4つ目の感性はそういった部分でクローズアップしている、との説明がなされた。

永井委員から、1つの学校で見た場合、ずっと1の柱が続いてもいいのか、努

力目標の1から4をまんべんなく回すことになっているのか、との質問がなされた。

安保指導室長から、各学校で単年度の努力目標を決める際、これをという1つの柱を意識しながら設定するが、子どもの様子、地域の声を踏まえ、今年はどうしようということを決める。全てを網羅することは難しいが、内容によってはクロスオーバーすることがあるため、学校としては、1と2あるいは1と3という意味合いで掲げるということはある、との説明がなされた。

永井委員から、1人の子どもが小学校の6年間、1の柱ばかりということもいいとは思いますが、今年が1の柱だったら来年は4の柱にするなど、バリエーションを付けるように通知しているのか、あるいは学校独自で1の柱ばかりでもいいというように通知しているのか、との質問がなされた。

安保指導室長から、各学校がどのようにテーマを決まるのかは毎年職員会議で論議するため、言葉は違っていても1の柱の内容が続くことはあると思う。ただし、4つの柱は努力目標に必ず入れなければいけないということではなく、全てを心がけてほしいという通知を出しており、努力目標に入っていなければそれ以外の事柄を指導しないわけではないため、力点を置くのはこれであるが、それ以外もバランスよくやっていただくということをお願いしている、との説明がなされた。

全委員の賛成をもって可決された。

第3号議案 平成23年度 教職員研修の基本方針について

○川北教育センター研修部長から第3号議案について次のとおり説明がなされた。

「前文」と、下の枠の中にある4点の「研修のねらい」で構成している。

平成23年度の基本方針については、現在の「なごやっ子 教育推進計画」に変わり、平成23年度から26年度までの本市教育の指針となる「名古屋市教育振興基本計画」が検討されていることを踏まえて、文言の見直しを行った。

第1段落には、本市が「名古屋市教育振興基本計画」の基本理念に示された「夢に向かって人生を切り拓くなごやっ子」の育成を目指していること、ならびに、その実現のために、横の連携と縦の接続を重視した教育の提供が求められていることが述べてある。

第2段落には、第1段落に示したような教育を提供するために、教職員や学校に求められている事柄が述べてある。

その1つ目が、一人一人の教職員が自らの人間性を磨き専門性の向上を図ること、そして2つ目が、校園長のリーダーシップの下、教職員が一丸となって学校全体の教育力を高めることである。

この2つのことを通して、子ども・保護者・地域社会からの教育に対する信頼を確立していくことが必要であるという考えを示した。

そして、第3段落には、教育センターが教職員の自主的な研修の促進と補完を担う立場にあることが述べてある。

その下の枠の中には、教育センターが研修の4本柱と位置付けている、「基本研修」「経営研修」、「専門研修」、「長期研修等」のそれぞれの研修のねらいが順に記述してある。

次に資料1をご覧いただきたい。

平成23年度の研修の重点を、1「教職員の人間性と専門性の向上」、2「学校の教育力の向上」、3「子ども・保護者・地域社会からの信頼の確立」という3点にまとめた。

1の「教職員の人間性と専門性の向上」には、個々の教師の資質や指導力の向上のために、重点的に取り組む研修の内容が示してある。

増加している若手の教員の指導力の向上、新学習指導要領への対応などを重点に、研修を実施していく。なお、いじめへの対応については、当事者である子どもだけでなく、その保護者の心情に寄り添った対応の必要性等についても、学ばせていきたいと考えている。

2の「学校の教育力の向上」についてである。

学校教育を効果的に進めるためには、先程述べた個々の教職員の力量向上と併せて、校園長のもとで、全ての教職員が力を合わせて、学校全体が組織として機能することが大切である。

こうした学校を実現させるため、管理職に対する研修において、学校経営能力や人材育成能力を育てるとともに、「基本研修」や「専門研修」において、すべての教職員が協働の意識を持つことの大切さを学ばせていく。

3の「子ども・保護者・地域社会からの信頼の確立」には、教育に対する信頼を確立するための研修の重点が示してある。

初任者研修から校園長研修に至る研修を通して、信頼される学校づくりの大切さを学ばせるとともに、教師としての誇りや使命感の育成・向上を図っていく。

なお、個々の研修については、学びの連続性の重視や国語力の向上など、現在、策定作業が進められている「名古屋市教育振興基本計画」に示された事柄を踏まえた内容を盛り込む考えである。

次に資料2をご覧いただきたい。

これは、平成23年度の教育センターにおける教職員研修を体系付けたもので、◎印のゴシック文字で表したものが、資料1で説明した重点事項を含む研修講座となっている。

以上が「平成23年度教職員研修の基本方針」についての説明である。

なお、研修を進めるにあたり、教職員のニーズや意欲を受け止め、身に付けた力が子どもの指導や学校教育の推進に役立てることができるようにしていきたいと考えている。

三林委員から、資料2の研修体系で多くの研修が掲げられているが、それぞれの必須か任意の位置付けを説明してほしい、との質問がなされた。

川北教育センター研修部長から、「基本研修」については、それぞれ該当する者がその立場になれば受講することになる。その下の「経営研修」についても、校園長、教頭になった時に受講することになる。中央と右側にある「専門研修」と「長期研修等」については、希望者が受講するという位置付けである、との説明がなされた。

三林委員から、任意の研修について、個人で考えた場合にキャリアプランのようなものはあるのか、との質問がなされた。

川北教育センター研修部長から、例えば資料2の中央にある「課題別研修講座」の一番上、「学校運営推進講座」という研修は、経験を一定程度積み、教務主任になる前後に学ぶのがよいというように、教育センターとしては、教員が新卒から退職までの間に、それぞれの経験を踏まえ、どの研修をどの時期に受けることが適当なのかという案は持っているが、必ずしもこの時期にこの研修を受けなければならないということではないため、このように受けなさいと示してはいない、との説明がなされた。

三林委員から、そのプランはだれでも見ることができ、自らが率先して受講しようと思えば、計画的に研修を受けられる状態であるのか、との質問がなされた。

川北教育センター研修部長から、現在は広く示してはいないが、受講者が自分の年齢であればどの研修がいいのかということを考える上で、案を示すということは大変望ましいことであるため、今後そのようにできるよう、前向きに考えたい、との説明がなされた。

野田委員から、資料2にある研修について、私も教員時代にいくつか受講し、非常に教師力をつけられたと思う。また、予算がかなり削減されており、工夫が大変だと思うが、特に私が研修を受けてきて思ったことは、共同意識を高めるような研修が大事だと思う。研修を受けた仲間どうしが共同意識を高めながら、互いに向上していけるような研修を重視してほしい。また、資料1の冒頭に「急激に増加する若手教員の実践的指導力向上」とある。私もやらせていただいたが、教員免許更新講習で、例えば10年目の先生方が1年目の新任の先生方の面倒を見ることは本当の自己更新になると思う。1年目の先生に関わりながら自らが磨かれていく。これは20年目の先生も30年目の先生も同じだと思う。10年目研修などでそういった機会があるとさらに共同意識が高まるのではないかという感想を持った、との意見が出された。

川北教育センター研修部長から、教育センターが行っている研修の中に「アイデアいっぱい！楽しい授業づくり講座」というものがある。これは、教職経験が10年目から20年目くらいの教員が講師となり、自分の持っているノウハウを若い教員に伝えるというものである。また、センター研究において、10年目程度の教員がメンターとなって、若手教員をいろいろな部分でメンティーとして育てていくという、現場での研修の進め方を現在研究しており、3月2日に発表する予定である。こうしたことを学校現場に提案し、ご指摘のように経験のある教員が若手教員を育てるといふ、現場での研修が活発に行われるようにしていきたい、との説明がなされた。

坂井委員長から、昨年の基本方針と若干変わっており、文言でいえば「学校・家庭・地域の環を確立する」、「学びの連続性を重視した教育を実現する」といったところが新しい文言だと思うが、これらに対する具体的な考えはあるか。「学校・家庭・地域の環を確立する」ためには、学校自体が信頼されなければいけないが、信頼される学校づくりのためにどのような研修を行うのか。あるいは「学びの連続性」といふと、幼稚園から小学校、小学校から中学校など、教員の派遣も含めて考えているのか、との質問がなされた。

川北教育センター研修部長から、まず「学びの連続性」については、異校種の理解を積極的に進めたいと考えている。例えば幼稚園に勤めている者が小学校の授業を見に行く、あるいは小学校から中学校を見に行くというように、研修の中で異校種の理解を深められるような内容を入れていく。また、例えば特別支援教育においては、幼稚園の研修の中にも特別支援教育を盛り込み、そこから、小学校、中学校、高等学校、全ての研修の中に系統付けて位置付けるこ

とにより、特別な配慮を要する子どもへの支援や援助が系統的な流れの中で行えるようにしていきたいと考えている。「学校・家庭・地域の環を確立する」ことについては、先ほどのご指摘のとおり、信頼される学校づくりを行う必要がある。例えば、いじめ等についても、これまでは、ややもすると子どもへの対応ばかりを考えていたかもしれないが、その裏にいる保護者も同じように悩んでいるため、保護者の気持ちも推しはかって接することの大切さを研修の中で学ばせるということも含めて扱っていきたい、との説明がなされた。

全委員の賛成をもって可決された。

第4号議案 名古屋市教育委員会表彰について

午後2時48分閉会

名古屋市教育委員会定例会

平成 23 年 1 月 19 日
午後 2 時 00 分
教育委員会室

議 案

第 4 号議案 名古屋市教育委員会表彰について

出席者

坂 井 克 彦 委員長
三 林 久 美 委 員
永 井 幸 代 委 員
古 川 隆 委 員
野 田 敦 敬 委 員
伊 藤 彰 教育長

教育次長始め、事務局職員 28 名

第 4 号議案 名古屋市教育委員会表彰について

○西淵教職員課長から第 4 号議案について次のとおり説明がなされた。

今回は個人表彰 2 件である。

1 件目は、名古屋市立向陽高等学校 2 年生の河田智明君は、昨年 10 月 1 日に開催された、「平成 22 年度 U - 20 プログラミング・コンテスト個人部門」において、経済産業大臣賞を受賞したものである。

このコンテストは、情報化社会に貢献する若い人材の発掘・育成を目的として、経済産業省を中心として、文部科学省・内閣府などの関係各府省の主催で行われたものである。

今回の河田君の作品は、日本地図の閲覧ソフトウェアである。地図データをダウンロードしておけばインターネットに接続不可能な場所でも閲覧可能であるという点や無駄な機能を排除することにより、シンプルで使いやすく軽量であるという点が評価されたと聞いている。

従って、名古屋市教育委員会表彰規則第 3 条 3 号に該当すると考え、表彰を行いたいと考えている。

2 件目も、名古屋市立向陽高等学校 3 年生である。岡部桃子、正岡春乃、森ことのさんの 3 名は「テッポウユリの雌しべにおける糖の役割」を 9 月 11 日に愛知県で開催された日本植物学会第 74 回大会内での「日本植物学会・高校生ポスター発表会」で発表し、最優秀賞を受賞した。また、「第 9 回神奈川大学全国高校生理科・科学論文大賞」で最高賞の大賞を受賞することが決定している。

研究内容は、テッポウユリの花粉管の伸長が、雌しべから供給される糖に依存しているという仮説を立て、研究の目的、各検証実験の意味、実験結果に対する理解が非常に高いレベルであるという点が評価されたと聞いている。

従って、名古屋市教育委員会表彰規則第 3 条第 1 号に該当すると考え、表彰を行いたいと考えている。

なお、お認めいただけたら、記者クラブ発表をこの教育委員会終了後に行い、表彰は明日の午後に行う予定である。

坂井委員長から、SS クラスとはどのようなクラスか、との質問がなされた。

西淵教職員課長から、向陽高等学校は 5 年間の指定で、文部科学省のスーパーサイエンスハイスクールという事業に参加している。SS クラスとはクラスの名称で、グループごとに研究課題を持って取り組んでいる、との説明がなされた。

坂井委員長から、文部科学省の指定は 5 年だけなのか。また、文部科学省から予算はくるのか、との質問がなされた。

朝倉主幹（高等学校・幼稚園教育）から、本年度が最終年度になるが、学校からは継続申請を提出しており、認められれば 5 年間延長となる。また、指定されれば文部科学省から予算がくる、との説明がなされた。

伊藤教育長から、実験器具や外部講師の謝金がもらえる、との説明がなされた。

坂井委員長から、名古屋市立では向陽高等学校のみか、との質問がなされた。

朝倉主幹（高等学校・幼稚園教育）から、そうである、との説明がなされた。

永井委員から、SS クラスに入るためのテストはあるのか、との質問がなされた。

朝倉主幹（高等学校・幼稚園教育）から、向陽高等学校の普通科を受験し、合格後にそのクラスを選択することになる。そのクラスに入るためのテストはない、との説明がなされた。

坂井委員長から、表彰を行った後、記者クラブから取材されることもあるのか、との質問がなされた。

伊藤教育長から、表彰は公開で行っているため、取材されることもある、との説明がなされた。

全委員の賛成をもって可決された。